

グッゲンハイム美術館

The Salomon Guggenheim Museum



5番街から見たグッゲンハイム美術館 左側に増築された新館のタワーが・・・

1981年夏8月、一月に及ぶアメリカ旅行の途中でニューヨーク市を訪れた。マンハッタンの真ん中、ミッドタウンにあったベッドだけのホステルで寝起きしたが、爽やかな天候が続き、疲れ知らずで市内を歩き回った。この頃、サンフランシスコから上陸して半月近くがたっていた。そろそろ日本食が恋しくなっていた。そこで、やはりミッドタウンの『札幌ラーメン』の店で味噌ラーメンをすすった。学生の貧乏旅行で、よれよれのジーンズとTシャツ姿は、さぞかし見すばらしく映ったのだろう。近くに坐った日本人のご婦人が話しかけて来た。否、日系アメリカ人の小日向という人だった。もちろん、この晩の食事代くらい持ち合わせはあったが、どういう展開だったか結局、おごってもらうことになった。

互いに日本語でやり取りできるため、カウンター席同士だったが話が弾んだ。ニューヨークでおすすめの場所は？の話しになって、こちらが建築に興味があることを言ったせいか、真っ先に挙げたのがこのグッゲンハイム美術館だった。そこに明日にでも行こうと思っていた私は「是非行って来ます！」と言い、二人で店を出た。支払いの際に、小日向さんがやけに細かく計算し、チップを置いていたことを思い出す。

ソロモンR.グッゲンハイム美術館は、南北に長いマンハッタンのやや北寄り、同様に南北に長いセントラル・パークを挟む東西の道で東側となる、5番街の中程に立っていた。俗にアップパーイーストと呼んでいる地区だ。この辺り、後程取り上げるメトロポリタン美術館など

も並んでいるので、ニューヨーク子はミュージアム・マイルなどと呼んでいる。5番街を北上すると、遠目に見てもそのカタツムリのような独特な外観ゆえ、すぐにわかる目立つ存在だった。建築家は日本でも著名だったフランク・ロイド・ライト※1で、1959年に開館した。外観もさることながら、入館した後、内部の広々とした空間に驚かされた。カタツムリの内側である。見上げると、頂上を大きな丸い天窓がおおい、そこかららせん状にこの中庭を囲むようにギャラリーが降りてくる形となっていた。

1階の一角にある受付で入場手続きをしようとした際、直前の青年たちが何やらフランス語で受付の婦人と話していた。受付の人が欧州から来たフランス人客と楽しく会話している姿に、何か気が引ける思いがした……。その案内だと、まずはエレベーターで最上階に上り、円形の内壁に展示されている作品を見ながらゆっくりと降りてくる順路だと言う。美術館では作品を座って鑑賞するのは不都合なので、歩きながら鑑賞するのが一般的だが、その作品を見続けるのは結構疲れが出る。その点でもライトのアイデアは秀逸(しゅういつ)だと思った。何より天井の天窓から降り注ぐ穏やかな昼光が醸し出す温かな雰囲気が良い。作品を自然光で眺めると言うのも、鑑賞の本来の在り方では？と思う。完成まで15年を要したと言うが、その理由は従来にない建築構造で、建築基準などの法規に触れるため、ニューヨーク市当局の規制に何度もぶつかったためだそう。おかげで、ライトの作品としてはニューヨーク市に唯一遺されたこの建物だが、その完成を見ることもなくライト自身は開館の数か月前に没している。※2



グッゲンハイム美術館 内部の天井部を見上げる

収蔵作品は、西洋の近代及び現代の絵画で、抽象画が中心だった。こうした傾向は大富豪の御曹司ソロモンが金に飽かせて買い集めた初期の作品群とは異なり、30年代以降はコレクターとしてのグッゲンハイム財団に一貫している。自分が中学生だったか、東京で開かれたモディリアーニ展に姉と出かけた。そこで見たモディリアーニの妻、ジャンヌ＝エビュテル

ヌの面長(おもなが)の肖像に強い印象を受けた。実際のジャンヌを写し取ったものとは言えないイラストではと思える作品だ。それは姉も同じで、会場の売店で複製画を買い、家で大事にしていたことを思い出す。そう彼の作品も数点ここで見かけた。階下へと降りて来ると、スペインのミロやオランダ出身のモンドリアンの作品など、抽象の度合いが増した。モンドリアンの、直行した黒い線で構成されたステンドグラスを思わす作品や、ミロのシュールな絵画には、何か人を惹きつけるものがあると感じた。

ソロモンの姪(めい)、ペギー・グッゲンハイムも有名な現代美術のコレクターで、イタリアのヴェネツィアが気に入り、ここに居を構えて30年近く滞在した。1979年の逝去後、彼女のコレクションは邸宅を美術館に改装して一般に公開されている。さらに1997年、スペインのバスク州政府の誘いに乗り、グッゲンハイム財団はその作品の巡回展示も目的とする施設としてビルバオ市の川沿いにビルバオ・グッゲンハイム美術館を開館させた。設計者はカナダ出身のフランク・ゲーリーで、コンペで勝ち残り完成させた。しかし、これもグッゲンハイム財団の意向でライトのニューヨークの建物が意識され、かなり奇抜な美術館となっている。いつか行ってみたいと思うが……。



ビルバオのグッゲンハイム美術館

さてニューヨークでは自由の女神観光など数日を過ごし、次にボストンに向かった。4日近くかの地に滞在した。大学時代のクラスメイトの一人、石田君の宿泊先にお世話になった。港の名店でロブスターをいただいたり、メイフラワー号の上陸先プリマスに遠出をしたり、楽しい時を過ごした。その後、グレイハウンド・バスでニューヨーク市へととんぼ返りした。

翌日、広告代理店に勤める小日向さんに、彼女のオフィスで再会した。私の勤務先にぜひ来てくださいと言われていたから。ミッドタウンのそのオフィスで開口一番聞かれたのは、グッゲンハイム美術館はどうだった？という問いだった。私は、思わずアメイジングとか何とか、とにかく感動したことを伝えた。居合わせたアメリカ人の同僚が、笑顔でうなずいたことを思い出す。小日向さんとは、帰国後もやり取りしたが、病気をされたとかで、随分間をおいて手紙が届いたのを最後に、音信が途絶えてしまった。どうされているだろう？

※1 ライトが手掛けた日本での代表作は、今は愛知県の明治村に一部が移築された帝国ホテル旧館や、池袋の自由学園明日館などがある。

※2 建物の完成を見ぬまま逝去したライトだったが、出現したその作品にはニュー Yorker の多くが関心をもったようだ。当時、芸能活動のかたわらこの街で建築を学ぶ大学生となっていたアーサー・ガーファンクルは、あの有名なアルバム『明日に架ける橋』でポール・サイモンに依頼し、「フランクロイドライトに捧げる歌」を収録している。

メモランダム

公式サイトは、www.guggenheim.org となります。

住所は、1071 Fifth Ave, New York, NY 88 丁目と 89 丁目の間を占める。

最寄り駅は、メトロ 4・5・6 号線の 86street 駅。西側のセントラル・パークを目指し、その後右折。徒歩 8 分。

クリスマス休暇などの数日を除き、年中無休。

現在の美術館は、隣接して四角な新館を増築し、コレクションもさらに充実している。

入場料は、大人 25 ドル。65 歳以上と学生 18 ドル。土曜の午後 4 時から 6 時に限り、10 ドルを目安の任意の支払いで入場可。